

SRID NEWSLETTER

No. 372 NOVEMBER 2006 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

11 月号

30 年という年月

河合三良氏の追悼 SRID シンポジウムの報告

JBIC 荒川博人

シンポジウム幹事 松久逸平

お知らせ

1. 新年会 1月18日(金) 午後6時から 会場 :如水会館幹事会
2. 幹事会 12月6日(水) 午後6時30分~8時30分 場所 JBIC
3. 懇談会

日時: 11月22日 18:30-20:30頃

テーマ: 『ノルウェーの平和構築への取り組み』 (仮題)

発題者: 在京ノルウェー大使館政務担当二等書記官

Mr. Per Bardalen Wiggen

会合の性格: 今回は、ノルウェーの平和構築への取り組みについて発表して頂いた後、ブレイン・ストーミングをしてみたいと思います。

会場: 国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室

河合 三良氏 ご逝去

SRID 創設時からのメンバーで国際開発センター理事の河合 三良氏が 10 月 27 日ご逝去されました。SRID への多大なご貢献を感謝するとともに、国際協力における故人のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

30年という年月

JBIC 荒川 博人

1. 2006年：

先週10月31日 韓国の経済開発協力基金（EDCF: Economic Development Cooperation Fund）とJBICとで業務連携協定を締結した。また、今年5月末にはタイの周辺諸国経済開発協力庁（NEDA: Neighbouring Countries Economic Cooperation Agency）とも同様に締結し、昨日もJBIC本部で具体的な協議をNEDAとの間で行った。

EDCF および NEDA とともに開発援助機関であり、いわゆる **新興援助機関** として、今後益々重要な役割を果たすことが期待されている。連携協定はJBICと新興援助機関が開発の課題について意見交換するのと同時に、その組織作りをJBICがお手伝いすることに合意するものである。

2. 1976年：

小生が海外経済協力基金（当時のOECE、現在のJBIC）の総務部に勤務し始めた年であり、最初のまとまった仕事は世界銀行とOECEとの年次協議のアレンジであった。年次協議では、開発に関する課題、主要被援助国に関する意見交換、さらに協調融資に関わる協議などであった。協議の最初には両機関の代表からのオープニングステートメントが述べられ、世銀からはバーク・ナップ副総裁の次の発言から始まったと記憶している。

「昔、私が日本を担当していた頃、このようにテーブルのこちら側と向こう側で話をするのは援助する側と受け取る側との関係であった。しかし日本が発展し、今日は開発援助のパートナーとして開発課題や協調融資などについて議論するためテーブルに着いているということは、私の欣快の至りである」。こんなセリフを小生もいつか言える日が来るのかなーと、まだ就職したての若輩が妙に感動したことを覚えている。その後、小生は多くの国を担当し、また駐在もした。その中では韓国、タイへの円借款も担当した。

3. 再び2006年：

韓国・タイとも当然ながらOECDの開発援助委員会（DAC）には入っておらず、国際的にはDACのガイドライン等の制約を受けない。しかし、国際社会において今後開発援助供与国としてきちんとした仕事をし、それなりの評価を勝ち

得るには、単に輸出促進の延長ということではなくて、途上国の開発という視点と業務の質が要求される。韓国は2010年ごろにはDACへの加盟を目標としている。タイも周辺諸国への開発援助を行い始めたが、その業務の質向上は急務となっている。とりわけ、昨今の国際場裏におけるハーモナイゼーションやガバナンスへの取り組み、評価手法の確立、環境をはじめとした各種ガイドラインの遵守などは一種の国際ルールである。

一方、今後両国とも援助量の拡大を企図しており、これらの機関との情報交換さらにこれら機関の上記への対応のための組織作りを支援していくことが日本の役割となっている。EDCF, NEDA 両機関が最初の国際的なイニシアティブに参加したのは、今年9月のシンガポールIMF/世銀総会時の、JBIC/フランス援助庁(AFD) /ドイツKFW主催のセミナーにおいて、「21世紀の維持可能な都市開発」というイニシアティブへの参画だった。最初は単に日欧の援助機関で発表しようかと考えていたのだが、韓国・タイの両機関をこのような場に参加してもらうことで、今後の開発援助コミュニティへの道筋になってもらいたいとの思いがあった。

連携協定の中身であるが、被援助国たる途上国に関する情報交換は当然として、JBICにおけるオンザジョブトレーニングやJBICファクトファインディングや審査ミッションへの参加、合同の事後評価、アドバイザーの派遣など多岐にわたる支援メニューから成る。両機関ともに志高く、スタッフ年齢も若く、謙虚で意欲に燃えた人員を有し、今後の両国の国際舞台で重要な役割を果たすと見られる。

このような連携がさらに発展し、途上国のマクロ状況に関わる意見交換、CAS(Country Assistance Strategy)やセクターの課題に関わる協議、さらにそれをふまえた協調融資などが想定されている。勿論、**多様な**アジアの発展の経験などがその際には大いに活用されることとなろう。

4. 仕事の醍醐味

30年前の世銀副総裁の発言をぜひ小生もやってみたいと思っていたが、今年ついに実現した。2国間の援助機関で、このような経験を出来るというのはなかなか無いことであろう。

今後、DAC や開発関連の国際的な場において、これら機関と協調することによって、開発のスケールアップや開発成果の効率性向上、さらにアジアの声、アジアのプレゼンスが高まることも、それに伴い日本の発言力も強化される日が来るのもそう遠くはないことを期待したい。

河合三良氏の追悼 SRID シンポジウムの報告

シンポジウム幹事 松久逸平

1. 日時・会場

10月28日(土) 10:00~17:00 JICA 国際協力総合研修所

2. 参加者 33名

3. 内容

(1) 高橋会長基調講演

- ・援助パラダイムの変化、脆弱国家の定義について

(2) 各発表者による発表(以下、当日の発表順とは不同)

- ・中島様 「植民地時代と今」
- ・高瀬様 「新たな開発協力のあり方—拡大する脆弱国家群への取り組み」
- ・高倍様 「中央アフリカやコンゴ民主共和国の場合」
- ・小林様 「脆弱国家の経営」
- ・宮入様 「わが国 ODA の現状・その改革の見通しについて」
- ・高津様 「国際社会への貢献と協力—アジア地域の連携と協調のための国際公共財としての交通インフラ整備に向けて—」
- ・石尾様 「紛争後の復興支援活動に日本の文民が参加する場合の重要なポイント他」
- ・福永様 「提言、『和』の精神と、『憲法九条を世界遺産に』」
- ・神田様 「脆弱国家と文明の生態史観他」
- ・学生部 「主要ドナーの脆弱国家への支援状況に関する調査」

(3) 高橋会長総括講演

各発表者の方のレジュメの送付をご希望の方は、事務局三上までご連絡ください。その他今回に限らず、SRID シンポジウムにつきましてご意見、ご提言等がございましたら同様にお寄せください。

今後ともよろしくお願いいたします。